

# ことばを生きる体験 (一)

## — 乳児との語りあい —

浜口 順子

〔エレベーターの中で〕

エレベーターにたまたま乗り合わせた二人の人が、無言のまま階級ランプの流れゆく点滅を見上げている——これはことばの交わされない状況の居心地悪さを象徴するひとつの構図といえよう。乗り合わせた瞬間に軽く会釈でもしておけばまだ救われるのだが、さらに自然なことばのやりとりがあればその狭い空間でのひとときは一層過ごしやすいものになるだろう。たとえは、ひとりの方が大きな荷物を両腕に積み上げているのを見て、「大変なお荷物ですね」「ええ、でもこれも仕事ですからね、慣れてますよ」とことばを交わしたり、小さな子ども連れの母親らしき人に「かわいいお子さんですね、坊やいくつかな」「三つになったのね」などと話したりすることもあるだろう。この会話のなかで荷物や子どももの

年令のことなどは話し手にとって是非とも情報として知りたいたいような対象となっているわけではない。なにかことばを交わすこと自体がここでは大切なのである。

ことばが人と人との関係の性質を変えるはたらきをすることはあらためていうこともないだろうが、右の例にみるような、ことばのなかに本来含まれている意味はともかく、語られること自体が状況を新しくするということばの一側面について考えてみたい。

〔赤ちゃんに語りかけること——声の介在〕

歌謡曲ではないが、「こんにちは赤ちゃん、わたしがママよ」というようなことを、たいていの母親が生まれて間もないわが子に語りかけるのではないだろうか。こちらの姿をどれだけその網膜に映し出しているのか、こちらの声をどの程度雑音と聴き分けているのか、こうした問題は近年の乳児研究がかなり解明してきてはいるけれど、そんな知識とは関係なく、とりあえず何かは伝わるだろうという願望を抱いて話しかける。いやむしろ自

然と語り出してしまっているという方が現実に近いだろう。乳をその口に含ませてやるときに「おっぱいですよ……ここですよ……」と教えるようにしたり、おしめをかえるときにも「おしっこしたのね……きれいにしましょうね……」などとことばをかけながら手を動かしている。よほど疲れてでもいるときは別だが、たいてい状況にあわせて語りかけをしている。

なぜこのような行動をとるのだろうか。理由として考えられるのは、ことばの理解はできなくても伝えたい事柄の雰囲気ぐらいは伝わるだろうと、思って話しかけるということ。あるいはもうことばの学習は始まっているのだから、と意識的に語りかけをしている場合もあるかもしれない。しかし人は道端のイヌやネコにも「おいで、おいで」とか「おうちはどこ」などと話しかけるのである。理由としてあげればたしかに右のようなことになるかもしれないが、それ以前に理由もなく話しかけたくなる衝動があることもたしかである。つまり人は関心を向けている対象（人、もしくはそれに準ずるような動物や

ものなど)に声をかけたくなるのだ。そしてその声がことばのかたちになっていることが多いということである。ことば以外にも歌、叫び、嘆息など状況のありかたに左右されて多様な声のかけ方がある。

それではなぜ相手に声をかけたくなるのだろうか。反対に声のない状況を想定すると、たとえば先のエレベーターのなかの「居心地悪さ」に思い当たる。もともと知らないどうしであっても、エレベーターの狭い閉塞された空間がおたがいを無関心にはさせておかない。相手のことが気になるうえに、相手からも気にされているようで落ち着かなくなる。個と個が出会い、安定した共存空間を得るためには、それぞれ固有の世界の一部を相手に向けて開く必要がある。つまり自分の一部を相手の前に現し分かちあう行為に迫られるのだ。その典型は手をさしのべる動作であろう。そして声もこのとき手にかわるはたらきをしている。相手に声をさしのべる。たいていはことばのかたちとなって語りかけられる。ことばが手のようにさしのべられて相手との隙間をつなぐ。

村瀬学は、人間にとって発声とは沈黙という安定、充足した領域を放棄(断念)して仲間(「類」)のなかに個を現す事だとしている。たしかにこれは彼が問題にしている「緘黙児」の構造を考えていくうえで有効であるに違いない。自分の世界に閉じこもって、喋ることによってその閉じた系を破らないことがその個にとっての安定につながるのとらえているからだ。しかし普通人と人との出会い互いに気づきあっているような状況では、それぞれの人の固有の世界はそれぞれの独立した領域を保持しにくくなり、沈黙していることが安定、充足に通ずるとは言いがたい。むしろその息詰まるような静寂を声によつてやわらげたい衝動にかられる。他者との関係性のもとでは、個としての自足はかえって居心地悪く感じられ、他者に開かれようとするものなのだ。妥協とか服従などの特殊な関係のことを言っているのではない。人と人との間、文字通り「人間」どうしの根源的なあり方について確認しているのである。

声は人と人の間に横たわっている沈黙に「間(ま)」

を与えて、関係を調整している。

朝、目覚めたばかりの赤ちゃんに「おはよう、朝ですよ、よくねむれたかな……ん、そうか、気持ちいいねえ」などと語りかけながら、母親もまた今日一日始まるのだというすがすがしさを覚え、同時に赤ちゃんの体調や機嫌を自然に感受する。ここで実際に語っているのは母親ひとりだが、実は赤ちゃんから伝わってくるものを受けながらのリズミカルな交歓になっている。また赤ちゃんと遊んでいるときに、「パッパババー」とか「カッキククック」などの擬音を伴って顔を近づけたりからだを揺らしたりしてやることもあるだろう。試しに途中でこうした声を出さないと身体運動だけ続けてみても、赤ちゃんの機嫌は相変わらずでリズミカルに笑っていることもあるのだが、声を出していないとなんとなく遊びづらいうような感じがおとなの方に残る。

山田洋子が乳児期初期の対人コミュニケーションを「うたう」関係として特徴づけているのは示唆に富む。

『うたう』は根源語であるから、音曲をつけて歌うこと

も、表情やしぐさで『うたう』（舞う、踊る）ことも、言葉で『うたう』（語る）ことも、拍手や手じめやパンザイ三唱で『うたう』こともあるが、その基本は、気持ちを合わせ、互いに響きあい、共鳴しあい、同じ感動のなかに融け合うところにある。」

このような関係のもとでは、相対する二者が双方から歩み寄って声を出し合うというより、まず二者のあいだに状況があつて、それが海綿のように双方から声を染み入らせているととらえられないだろうか。（個人の意志以前に）その人が置かれている状況が声を誘発して、二者のあいだの間（ま）を調整しつつ関係を展開させていくという構造が、乳児に語りかけようとする衝動を説明していると考えられる。

〔ことばとの二つの関係——「使う」と「生きる」〕

まずことばによって伝達される意味内容の性質について言及しておこう。たとえば「父」ということばは男性、（キリスト教における）神、（比喻として）創始者な

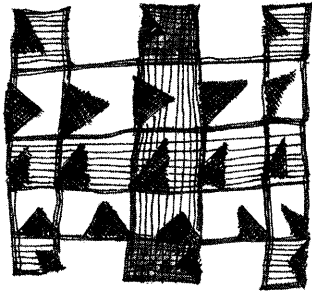
どのひろく社会的に通用する（辞書にでてくるような）意味内容をもつ一方で、ことばを使う人によって固有の「父」のイメージがあるし、またそのことばが使われる個別具体的な状況に結びついて「父」という語に特別な意義づけをする場合もある。ことばに込められる意味内容の一般性と特殊性という二重性を考慮して、前者を「語義」、両者の複合体を「意味」と呼び分けていくことにする。

心理学的に見て、ことば外に語りだされる外語と、思考や認識の用具としての内なる内語とに分けて考えられている。外語は要求や感情などを伝達するために人と人の意思疎通（コミュニケーション）を円滑にすすめるのをたすける。一方、内語は人がまわりの世界を一定の秩序にしたがって整理して認知する基盤としての機能をはたして、概念的・抽象的思考を可能にしているものである。これら内語や外語の概念が、そもそもことばとは記号として一定の意味を指示するものであるとする見方を基本としている点では共通している。

ところで乳児に語りかけることばはどうだろうか。たしかにことばである以上そのなかに意味が含まれてはいらぬ。だが、かならずしも意味伝達が目的になっているようなコミュニケーションとはなっていない。おとなと乳児との居心地よい状況のなかで「うたわれ」ていることばは、まず語りだされて、あとから意味がついてくる。

だからレロレロレロとか即興の鼻唄などの特に意味の盛り込まれていない声も、ことばに準じてよく口にされる。マザーゲースの詩が英語圏の子どもたちに親しまれ、子どもおとなを問わず、その日常的な言語生活のなかにも脈々と息づいているのは、ころころとこころがったり、波打ったりする語呂あわせのもつことばの妙がわくわくと心踊らせるからで、意味は自在にあとから駆けめぐってくるのに違いない。ことばの意味をひとまず解除して、ことばが語られることによって生じる表情を状況のなかで感受する体験は、もとより乳児との関係に限られるわけではなく、人と人が交わるところで日常的に営まれているのである。

ことばと人との日常的な関係のあり方を考えてみよう。まず思いつきやすいのは、意味を指示する記号としてことばをとらえて、人がことばに意味を付与し、ことばを「使う」という関係性である。これに対して、ことばを意味から浮遊させて、語られることば（音律や語られ方）のなかに人が融合するような関係がある。これをひとまず人がことばを「生きる」関係と考えることにする。ことばに対して人がとる二通りの態度（「使う」と「生きる」）は、実際には不可分であることが多く、そのとき人はことばを使いつつことばを生きている。「どっこ



いしょ」と荷物を持ち上げるとき、状況に矛盾しない有意味のことばを「使い」ながら、そのことばのもつイメージを「生き」て、からだ全体に勢いをつけるのである。しかしことばを「使う」だけで「生き」ていないこともよくある。なにか他の事に気を取られていて、相手が「ねえ、課長ったらひどいわねえ」と同意を求めてきているのに、ほとんど自動的に「うん、ひどいひどい」などと生返事をしている場合などは「生き」ているとはいえない。この場合は、状況に引張られてことばが誘発されているので、発声のメカニズムとしては乳

児に語りかけたくなる場合によく似ている。しかし「ひどいひどい」ということは語義が状況の表面的な流れにどうにか適合しているだけで、ことばがその固有の状況のなかで何を意味し、その人間関係をどう展開させるかという点においては対照的といえるだろう。

ことばに対する二通りの態度は（ことばを「生きる」とき、人はいわばことばのなかに住みこんで融合するあり方を示すので、正確にはことばに対する態度とはいえないのだが）、状況に応じて、比重を変えながら現れると考えるのが現実的であろう。

〔新生児の微笑に伝えられるもの〕

新生児期にみられる生理的的微笑というのがある。うとうとしかけているときによく口端をピクリとほほえむように動かす。生後間もない赤ちゃんというのは、顔の表情の変化に乏しく、せいぜい泣くぐらいなので、この「微笑」に出会うと心なごむものがある。しかし興味深いことに、たいていのおとなは「あっ、笑ったわ」と喜

びの声をあげるやいなや、「でもこれは本当に嬉しくて笑っているんじゃないのよねえ」と、まるで喜んでも仕方がないんだと自らに言いきかせるように言い直すのである。新生児の「生理的的微笑」についてこれだけ一般的によく知られていること自体が不思議のような気もするが、これは純粹な知識としてよりも、やはりその微笑を目のあたりにして「これは普通の微笑ではない」という状況判断が的確にはたらいっており、その確信が知識を追認しているというのが現実であろう。

一般的に、微笑というものが快い気分や相手を受容している態度を表すこと（微笑の語義）から、微笑はひとつの記号であり、ことばに準ずるはたらきをしていると考えられる。だから、自分からはまだ明確なことばを発しない乳児の微笑は、おとなにとってはことさら注目しなくなる「ことば」（サイン）のひとつである。おとなが赤ちゃんをあやすとき、赤ちゃんが笑ったりほほえんだりするのをただただ楽しみにしている。

生理的的微笑を前にして、一瞬は嬉しくなるが、その微

笑がかたちだけのもので、いわば一般的な語義とは別の意味内容を含んでいるらしきことに気づいて戸惑う。微笑という形式と語義とをただ自動的に直結させるのではなく、微笑の語られている具体的な状況を生きようとすからこそかえって戸惑いに近いものを感じてしまうのだろう。つまり赤ちゃんに関心を注いで共存的状況にあることによってその赤ちゃんの微笑の意味を、一般的な語義に制約されないで自在に読みかえることができるのだ。しかし状況に固有の意味と語義との間の矛盾を味わうのは、どこか不安でスリリングな体験でもある。だから二、三ヶ月頃からみられる「快」の記号としての微笑が見られるようになる、なお一層おとなは幸福な気持ちになるのであろう。

ことばを記号として「使う」一方で、意味から遊離したことばを「生きる」体験が人と人との関係的狀況を變質させることについて、今回はおもに乳児とおとなのいる狀況に着目して論じてきた。後半は、話しことばをも

つ子どもと共にことばを「生きる」問題を扱いながら考察を深めていきたいと思う。

#### △文献▽

竹内敏晴「ことばが劈かれるとき」思想の科学社、一九

七五

村瀬学「理解のおくれの本質」大和書房、一九八三、一

六七—一六九頁

やまだようこ「ことばの前のことば」新曜社、一九八

七、六五頁

(お茶の水女子大学)

#### 訂正

四月号 P. 37 「ある園のたより」欄「川崎若菜幼稚園」とあるのは「川崎若葉幼稚園」の誤りです。お詫びして訂正いたします。